

第9章 十分性、限界、そして多重閾値理論

著者: コリン・ヒッキー (Colin Hickey)

1. はじめに

十分主義(sufficientarianism)は、分配的正義に関する文献において現在までに十分に議論されてきたが、我々は人々が特定の財について十分(enough)持つことを確保するために、特に重要な(おそらく種類において異なる)理由を持つと主張する。分配的正義の文献へのより最近の参入者は、「リミタリアニズム(limitarianism)」と呼ばれる見解である。イングリッド・ロベインズによって造語されたリミタリアニズムは、特定の財について持ちすぎることは許容されないと主張する(Robeyns 2017)。言い換えれば、我々が正当に持つことができる資源の量には上限が存在する。文献における他の著者は、リミタリアニズムを「十分性を見解を逆さまにする」ものと捉えている(Volacu and Dumitru 2019)。十分主義者がすべての人が居住すべき閾値を特定するのに対し、リミタリアン主義者はすべての人が留まるべき閾値を特定する¹。

本章では、これら二つの見解の関係を評価する²。特に、十分主義者がリミタリアンのテーゼを支持すべきか(あるいは支持しなければならないか)、同様にリミタリアン主義者が十分性テーゼを支持すべきか(あるいは支持しなければならないか)を検討する。私は、十分主義者がリミタリアンのテーゼを採用する非常に良い理由を持つこと、そしてリミタリアン主義者が十分主義的テーゼを採用する非常に良い理由を持つことを肯定的に論じる。別の言い方をすれば、単に他方の見解を「逆さまにする」のではなく、二つの見解はそれぞれ、その内部に他方の種を含んでいることを示したい。

それぞれの見解が他方を受け入れなければならないかどうかという問いは、より論争的である。私は、見解の間の必然的な概念的つながりについていくつかの推測的な論証を検討するが、結果はより暫定的である。したがって、原理的には、一方の見解を他方なしに肯定することは可能かもしれないが、そうすることは動機づけが困難であり、推奨されない。

もちろん、人々が採用する、または採用できる十分主義またはリミタリアニズムのタイプには実質的な多様性がある。私はここで、見解の間の関係の一般的構造を理解するために、広く寛容であろうとしている。したがって、これは、一方の特定のバージョンが他方の特定のバージョンを拒否する良い理由がないと言っているわけではない³。

私は章の最後に、我々の最ももらしい分配的正義の理論が、ある種の構造を持つ「多重閾値(multi-threshold)」理論、すなわち(少なくとも)一つの十分主義的閾値と一つのリミタリアンの閾値を含む理論であることが、我々が考えるよりも実際には驚くべきことではないいくつかの理由を示唆する。そのような十分主義的およびリミタリアンの閾値の実質的内容を特定するという課題を軽視することなく、一般的構造は我々の標準的な義務論的概念言語に非常にきれいに対応しているため、我々の分配的正義の理論が並行する形態を取ることは驚きではないはずである。

2. 十分主義者もリミタリアン主義者であるべきか? そうでなければならないか?

本節では、十分主義者が資源蓄積の上限を定義するリミタリアンのテーゼも支持すべきか(あるいは支持しなければならないか)を検討することから始める。まず、この考えを最初から頓挫させる予備的異議に応答することでこれを行う。次に、十分主義者がリミタリアンのテーゼを追加的に支持することを支持するより肯定的な理由を検討する。節の最後に、そうすることが実際に必要であるかもしれない理由についてのより推測的な概念的理由を検討する。

2.1 予備的異議

十分主義者もリミタリアン主義者であるべきだという考えは、十分主義の文献に精通している一部の人々には、即座に異議を唱えられるものに思えるかもしれない。伝統的に、十分主義は二つのテーゼとの関連で提示されてきた:一つは「肯定的(positive)」、もう一つは「否定的(negative)」である(Casal 2007)。肯定的テーゼは、人々がある財について十分を確保することを確保するために我々が持つ特に重要な理由を強調する⁴。他方、否定的テーゼは、すべての人が十分を持って閾値を越えれば、閾値以上の利益と負担の分配に分配基準は適用されないことを示唆することを意図している⁵。そのため、十分主義は、分配的正義のより最小限主義的な種類の理論として理解されることが多い。それは、人々が十分を持てば、我々は特定の種類の不平等を心配する必要はなく、常に最も不利な立場にある人々を優先する必要はないと言う方法である。

この標準的な図式を考慮すると、十分主義者がリミタリアンのテーゼも採用すべきだと示唆することの潜在的問題を見ることは難しくない。十分主義の否定的テーゼは、最初からリミタリアニズムにもコミットする可能性を排除しないだろうか? 結局のところ、否定的テーゼは、「閾値以上の利益と負担の分配に分配基準は適用されない」という主張を支持している。しかし、リミタリアニズムはまさに、分配の上位層に分配基準を適用することを提案しているように見える。

この潜在的な緊張に対処するために、私は二つの応答を提供する:

応答1: 否定的テーゼの弱いバージョン

第一に、十分主義の否定的テーゼには、より強いバージョンとより弱いバージョンがある。強いバージョンは、十分性閾値以上では文字通り何の分配基準も適用されないと主張する。弱いバージョンは、十分性閾値以上では、閾値以下と同じ種類の緊急性を持つ分配基準は適用されないと主張する。

弱いバージョンの否定的テーゼは、リミタリアニズムと完全に両立可能である。それは、十分性閾値以上でも、異なる種類の、またはより弱い理由に基づく分配基準が適用される可能性を許容する。リミタリアニズムは、まさにそのような基準を提供する: 富の集中による害を防ぐという理由に基づく上限である。

応答2: 非理想理論への移行

第二に、そしてより重要なことに、十分主義の否定的テーゼは主に理想理論の文脈で理解されるべきである。それは、すべての人が十分性閾値を越えた世界では、追加の分配的懸念はないと言っている。しかし、我々が実際に住んでいる非理想的世界では、多くの人々が十分性閾値以下にいる。

非理想的条件下では、十分主義者は、すべての人が十分性閾値を越えることを確保するために追加の原理を必要とする。そして、リミタリアニズムは、まさにそのような原理を提供する可能性がある。上限を設定することで、再分配のための資源を解放し、より多くの人々が十分性閾値を越えることを助けることができる。

したがって、否定的テーゼは、十分主義者がリミタリアニズムも採用することを妨げない。むしろ、非理想的世界において、リミタリアニズムは十分主義の目標を達成するための手段である可能性がある。

2.2 十分主義者がリミタリアニズムを採用すべき肯定的理由

予備的異議を脇に置くと、十分主義者がリミタリアンのテーゼも支持すべき肯定的な理由がいくつか存在する:

理由1: 道具的正当化—緊急ニーズ論証

リミタリアニズムを支持する主要な論証の一つは、ロベインズによって提示された「緊急ニーズ論証」である。この論証は、富の余剰は、他者の緊急で未充足のニーズを満たすために使用できる(そ

して使用すべき)であると主張する。

十分主義者は、この論証を特に魅力的に感じるはずである。なぜなら、十分主義の中心的な関心は、すべての人が「十分」持つことを確保することだからである。もし一部の人々が十分性閾値以下にいる一方で、他の人々が富の上限を超える富を持っている場合、その余剰を再配分することは、より多くの人々が十分性を達成するのを助けることができる。

したがって、リミタリアニズムは、十分主義の目標を達成するための道具として正当化される。上限を設定することで、我々は、すべての人が十分性閾値を越えることを確保するために必要な資源を解放することができる⁶。

理由2: 政治的平等と民主主義の保護

リミタリアニズムを支持するもう一つの主要な論証は、「民主的論証」である。富の大きな集中は、民主的平等と政治的平等を脅かす。超富裕層は、政治家への資金提供、ロビー活動、メディアの所有を通じて、不均衡な政治的影響力を行使することができる。

十分主義者は、この論証にも関心を持つべきである。なぜなら、政治的不平等は、十分主義の目標を達成する能力を損なう可能性があるからである。もし超富裕層が不均衡な政治的影響力を持つ場合、彼らは、貧困層や不利な立場にある人々を助ける再分配政策に反対するためにその影響力を使用する可能性がある。

したがって、リミタリアニズムは、十分主義を実施するための政治的条件を保護する方法として正当化される。上限を設定することで、我々は、富裕層が十分主義的政策を妨害するためにその富を使用することを防ぐことができる。

理由3: 資源の浪費の防止

第三の理由は、資源の浪費に関するものである。十分主義者は、すべての人が十分性閾値を越えることに関心を持つ。しかし、限られた資源の世界では、一部の人々による資源の浪費は、他の人々が十分性を達成する能力を直接的に損なう。

上限を超える富は、しばしば奢侈品、過剰な消費、または生産的でない投資に費やされる。十分主義の観点からは、これらの資源は、まだ十分性閾値以下にいる人々のニーズを満たすためにより良く使用できる。

したがって、リミタリアニズムは、資源の浪費を防ぎ、それらの資源が十分主義の目標を達成するために使用されることを確保する方法として正当化される。

理由4: 気候変動と生態学的制約

より最近の論証は、気候変動と生態学的制約に関するものである。超富裕層の消費パターンは、しばしば高度に汚染的であり、気候変動に不均衡に貢献する。これは、将来世代が十分性を達成する能力を脅かす⁷。

十分主義者は、将来世代を含むすべての人が十分性を達成することに関心を持つべきである。したがって、彼らは、気候変動を悪化させる過度の富の蓄積を制限する理由を持つ。

2.3 概念的つながり: 十分主義はリミタリアニズムを必要とするか?

これまで、十分主義者がリミタリアニズムを採用すべき実践的および道具的理由を論じてきた。しかし、より強い主張も可能かもしれない: 十分主義は概念的にリミタリアニズムを必要とするかもしれない。

この主張を支持するための推測的な論証を二つ提示する:

推測的論証1: 「十分」の相対性

「十分」の概念は、少なくとも部分的には相対的である可能性がある。何が「十分」を構成するかは、社会における資源の全体的な分配に依存する可能性がある。

たとえば、ある社会において、人々が尊厳を持って生活し、政治的に参加し、社会的関係を持つために必要な資源のレベルは、その社会における資源分配の不平等の程度に依存する可能性がある。もし一部の人々が極端に富裕である場合、「十分」のバーはより高く設定される可能性がある。

もしこれが正しければ、十分主義者は、何が「十分」を構成するかを安定化させるために、上限を設定する理由を持つ。上限なしには、「十分」の概念は、富裕層の蓄積に応じて継続的に上昇し、十分性を達成することをますます困難にする可能性がある。

推測的論証2: 絶対的過剰の概念

より大胆な主張は、ある種の「絶対的過剰(absolute excess)」の概念が存在し、それは十分性の概念に内在している、というものである。

十分主義は、ある財について「十分」持つことが可能であると主張する。しかし、もし「十分」が可能であるならば、「持ちすぎ(too much)」も可能であるべきではないか? 何かについて十分持つことができるという概念は、それ以上は不要または有害であるレベルが存在するという考えを暗示しているように思える。

この論証は、より推測的で論争的である。それは、「十分」の概念が単に最低限(これ以下では不十分)を定義するだけでなく、最適または適切な範囲を定義することを前提としている。しかし、一部の十分主義者は、「十分」は単に最低限を意味し、それ以上については何も言わないと主張するかもしれない。

それでもなお、この推測的論証は、十分主義とリミタリアニズムの間の概念的つながりの可能性を示している。もしこのつながりが成立するならば、十分主義者は単にリミタリアニズムを採用すべきであるだけでなく、概念的にそうしなければならないことになる。

3. リミタリアン主義者も十分主義者であるべきか? そうでなければならないか?

前節では、十分主義者がリミタリアニズムを採用する理由を論じた。本節では、逆の問いを検討する: リミタリアン主義者は十分主義を採用すべきか(あるいは採用しなければならないか)?

私は、リミタリアン主義者が十分主義を採用する強い理由を持つと論じる。実際、リミタリアニズムを動機づける同じ論証の多くが、十分主義も支持する。

3.1 リミタリアン主義者が十分主義を採用すべき理由

理由1: 緊急ニーズ論証の対称性

リミタリアニズムを支持する主要な論証の一つは、緊急ニーズ論証である。一部の人々が余剰の富を持つ一方で、他の人々が基本的ニーズを満たせないことは不正義である、というものである。

しかし、この論証は、暗黙のうちに十分主義的コミットメントを含んでいる。それは、すべての人が基本的ニーズを満たすべきである、つまり、すべての人が「十分」持つべきであると前提としている。余剰の富が問題である理由は、それが他者の緊急ニーズを満たすために使用できる(そして使用すべき)であるからである。

したがって、緊急ニーズ論証は、リミタリアニズムと十分主義の両方を支持する。それは、分配の両端、すなわち上限(リミタリアニズム)と下限(十分主義)への関心を含んでいる。

理由2: リミタリアニズムの完全性

第二の理由は、理論の完全性に関するものである。リミタリアニズムは、上限を超える富をどうすべきかという問いを提起する。その富は再配分されるべきか? もしそうなら、誰に?

最も自然な答えは、その富は、最も必要としている人々、すなわち十分性閾値以下にいる人々に再配分されるべきである、というものである。しかし、これは十分主義的コミットメントを前提としている。それは、我々が優先的に援助すべき人々のグループ、すなわち「十分」持っていない人々が存在すると前提としている。

十分主義なしには、リミタリアニズムは不完全である。それは、上限を超える富が存在すべきでないと言うが、その富をどうすべきか、または誰が優先的に援助されるべきかについては言わない。

理由3: 民主的論証の対称性

リミタリアニズムの民主的論証は、富の集中が民主的平等を脅かすと主張する。しかし、民主的平等の反対側には、民主的包摂(democratic inclusion)がある。すべての人が民主的過程に完全に参加できるためには、彼らは一定の最低限の資源を持つ必要がある。

極度の貧困は、民主的参加を不可能にする。基本的ニーズを満たすのに苦労している人々は、政治的過程に参加する時間、エネルギー、または資源を持たない。したがって、民主的平等を保護するためには、我々は上限(リミタリアニズム)だけでなく、下限(十分主義)も必要とする。

理由4: 自律に基づく理由の対称性

ダニエル・ズワルトウッドは、極端な富が自律を損なう可能性がある」と論じている。しかし、極度の貧困も自律を損なう。基本的ニーズを満たせない人々は、自律的に生きる能力を持たない。

したがって、自律を保護し促進することに関心がある場合、我々は上限と下限の両方を必要とする。リミタリアニズムは上限を提供し、十分主義は下限を提供する。

3.2 概念的つながり:リミタリアニズムは十分主義を必要とするか?

十分主義の場合と同様に、リミタリアニズムが概念的に十分主義を必要とするかどうかを問うことができる。

推測的論証:「持ちすぎ」は「十分」を前提とする

「持ちすぎ(too much)」の概念は、「十分(enough)」の概念を前提としているように思える。何かが「持ちすぎ」であると言うとき、我々は暗黙のうちに、適切または十分な量のレベルが存在することを前提としている。

したがって、リミタリアニズムが「持ちすぎ」のレベルを定義する場合、それは同時に、「十分」のレベルも暗黙のうちに参照している。実際、ロベインズのリミタリアニズムの定式化は、上限を「十全に繁栄するために必要な資源」のレベルとして定義している。これは、まさに十分主義的閾値の定義である。

この推測的論証が正しければ、リミタリアニズムは概念的に十分主義を前提としている。上限を定義することは、同時に下限(または少なくとも適切な範囲)を定義することを含意する。

4. 分配的正義と多重閾値理論

これまでの議論が正しければ、十分主義とリミタリアニズムは相互に強化し合う見解である。十分主義者はリミタリアニズムを採用する強い理由を持ち、リミタリアン主義者は十分主義を採用する強い理由を持つ。実際、二つの見解の間には概念的つながりが存在する可能性がある。

これは、我々の最ももらしい分配的正義の理論が「多重閾値理論(multi-threshold views)」である可能性を示唆している。そのような理論は、少なくとも二つの閾値を含む:

1. **十分性閾値(sufficiency threshold):** すべての人がこれを上回るべき下限
2. **リミタリアン閾値(limitarian threshold):** 誰もこれを超えるべきでない上限

さらに、これら二つの閾値の間には、「中間範囲(intermediate range)」が存在する。この範囲内では、異なる分配原理(たとえば平等主義、優先主義、または機会の平等)が適用される可能性がある。

4.1 多重閾値理論の構造

完全な多重閾値理論は、以下の要素を含む可能性がある:

下限: 十分性閾値

- すべての人は、良い生活を送るために必要な基本的資源の閾値を上回るべきである
- この閾値以下では、資源を提供する特に緊急の理由が存在する
- 十分主義の肯定的テーゼによって捉えられる

中間範囲: 十分性とリミタリアンの間

- この範囲内では、異なる分配原理が適用される
- 可能性: 平等主義(平等な分配)、優先主義(より不利な立場にある人々への優先)、機会の平等(公正な競争)など
- どの原理が適用されるかは、さらなる規範的議論に依存する

上限: リミタリアン閾値

- 誰も、十全に繁栄するために必要な資源の閾値を超えるべきでない
- この閾値を超える資源は、十分性閾値以下の人々のために、または公共財のために再配分されるべきである
- リミタリアニズムによって捉えられる

4.2 多重閾値理論の利点

多重閾値理論には、いくつかの理論的および実践的利点がある:

理論的利点:

1. **包括性:** それは、分配の全範囲(下限、中間、上限)にわたる懸念を捉える
2. **柔軟性:** それは、分配の異なる部分に異なる原理を適用することを可能にする
3. **多元主義との両立性:** それは、異なる分配原理が分配の異なる側面に適用されるという多元主義的見解と一致する

実践的利点:

1. **政策的明確さ:** それは、具体的な政策提案(最低所得保障、累進課税、富裕税など)のための明確な枠組みを提供する
2. **政治的実行可能性:** それは、異なる政治的立場の人々にアピールする可能性がある(保守派は中間範囲の機会の平等に、進歩派は十分主義とリミタリアニズムに)

3. **直感との一致:** それは、多くの人々の前理論的直感と一致する(すべての人が最低限を持つべきであり、誰も持ちすぎるべきでない)
-

5. 分配的閾値と義務論的地位

本節では、多重閾値理論がなぜ驚くべきでないか、そして実際に我々の標準的な道徳的概念とどのように自然に一致するかを示す。

5.1 義務論的地位の三分類

標準的な義務論では、行為は三つのカテゴリーに分類される:

1. **義務的(obligatory):** 行わなければならない行為
2. **許容的(permissible):** 行っても行わなくてもよい行為
3. **禁止的(forbidden):** 行ってはならない行為

この三分類は、道徳理論において基本的である。それは、我々の道徳的責任を理解するための概念的枠組みを提供する。

5.2 分配的正義への適用

多重閾値理論は、この義務論的三分類を分配的正義に適用するものとして理解できる:

十分性閾値以下: 義務的

- 人々が十分性閾値を上回ることを確保することは義務的である
- これは、我々が行わなければならないことである
- 十分主義の肯定的テーゼによって捉えられる

十分性とリミタリアンの間: 許容的

- この範囲内での分配は許容的である
- 我々は、この範囲内での不平等を容認することができる(ただし、他の原理が適用される可能性がある)
- 十分主義の否定的テーゼ(弱いバージョン)によって捉えられる

リミタリアン閾値以上: 禁止的

- リミタリアン閾値を超える富を蓄積することは禁止的である
- これは、我々が行ってはならないことである
- リミタリアニズムによって捉えられる

5.3 概念的整合性

この対応は、多重閾値理論が我々の標準的な道徳的概念と整合的であることを示している。我々がすでに使用している義務論的カテゴリーを、単に分配的正義の領域に適用しているだけである。

したがって、多重閾値理論は、奇妙または異常な理論構造ではない。むしろ、それは我々の既存の道徳的枠組みの自然な拡張である。我々がすでに受け入れている義務論的区別を、資源の分配に適用しているだけである。

この概念的整合性は、多重閾値理論を支持する追加の理由を提供する。それは単に実践的に有用であるだけでなく、我々の道徳的思考の深い構造と一致している。

6. 残された問い

多重閾値理論が分配的正義の有望な枠組みであるとしても、重要な問いが残されている:

6.1 閾値の特定

最も重要な問いは、充分性閾値とリミタリアン閾値をどのように特定するかである。

充分性閾値:

- 何が「十分」を構成するか?
- これは文脈に依存するか、普遍的か?
- どのようにして特定の数値を決定するか?

リミタリアン閾値:

- 「十全に繁栄する」ために必要な資源はどれくらいか?
- これは充分性閾値とどのように関係するか?
- 異なる社会で異なるレベルを持つべきか?

これらの問いに答えることは、多重閾値理論を実施するために不可欠である。それは、哲学的議論と経験的研究の両方を必要とする。

6.2 中間範囲の原理

充分性とリミタリアンの閾値の間の中間範囲において、どの分配原理が適用されるべきか?

可能性:

- **平等主義:** 中間範囲内での平等な分配
- **優先主義:** より不利な立場にある人々(充分性閾値に近い人々)への優先
- **機会の平等:** 公正な競争、結果ではなく機会の平等
- **功利主義:** 全体的な福祉の最大化

異なる理論家が異なる答えを支持する可能性がある。多重閾値理論の枠組みは、この問いについて中立である可能性がある。それは、閾値の存在を主張するが、中間範囲の原理は別の規範的議論の問題として残す。

6.3 グローバルな適用

多重閾値理論は、グローバルなレベルで適用されるべきか、それとも国内レベルでのみか?

グローバル適用の論証:

- 正義は国境を越える
- グローバルな不平等は国内不平等よりも大きい
- 気候変動などのグローバルな問題は、グローバルな対応を必要とする

国内限定の論証:

- 国家は特別な義務を市民に対して持つ
- グローバルな制度の実施は困難
- 文化的多様性は異なる閾値を必要とする可能性がある

この問いは、分配的正義の範囲に関するより広範な議論の一部である。

6.4 動的考慮事項

閾値は時間とともに変化するべきか？

変化を支持する論証:

- 技術の進歩は「十分」の意味を変える
- 経済成長は、より高い閾値を可能にする(そして要求する)可能性がある
- 気候変動は、持続可能性の制約を課す

固定を支持する論証:

- 安定性と予測可能性の価値
- 相対的貧困の問題を避ける
- 普遍的な人間のニーズに基づく

この問いも、さらなる規範的および経験的研究を必要とする。

7. 結論

本章では、十分主義とリミタリアニズムの関係を検討してきた。私の主要な結論は以下の通りである:

1. **相互支持:** 十分主義者はリミタリアニズムを採用する強い理由を持ち、リミタリアン主義者は十分主義を採用する強い理由を持つ。
2. **概念的つながり:** 二つの見解の間には、概念的つながりが存在する可能性がある。「十分」と「持ちすぎ」の概念は相互に関連している。
3. **多重閾値理論:** 最ももっともらしい分配的正義の理論は、十分性閾値とリミタリアン閾値の両方を含む多重閾値理論である。
4. **義務論的整合性:** 多重閾値理論は、我々の標準的な義務論のカテゴリー(義務的、許容的、禁止的)と自然に一致する。
5. **残された問い:** 重要な問いが残されている、特に閾値の特定と中間範囲の原理について。

多重閾値理論は、分配的正義の包括的で柔軟な枠組みを提供する。それは、分配の全範囲にわたる懸念を捉え、具体的な政策提案のための明確な指針を提供する。そして、それは我々の既存の道徳的概念と深く一致している。

もちろん、多くの作業が残されている。閾値を特定し、中間範囲の原理を決定し、グローバルな適用の問題に対処する必要がある。しかし、多重閾値理論は、これらの問いに対処するための有望な出発点を提供する。

最後に、本章の分析は、十分主義とリミタリアニズムが対立する見解ではなく、相互に強化し合う見解であることを示している。単に一方を他方の「逆さま」にするのではなく、二つの見解は共に、分配的正義のより完全で微妙な理解に貢献する。我々は、下限と上限の両方を、そしてそれらの間の空間を、真剣に受け止める必要がある。多重閾値理論は、まさにそれを行うための枠組みを提供する。

参考文献

Brown, Campbell. 2005. Priority or Sufficiency...or Both? *Economics and Philosophy*, 21, 199–220. <https://doi.org/10.1017/S0266267105000568>

Casal, Paula. 2007. Why Sufficiency is Not Enough. *Ethics*, 117, 296–326. <https://doi.org/10.1086/510692>

Crisp, Roger. 2003. Equality, Priority, and Compassion. *Ethics*, 113, 745–763. <https://doi.org/10.1086/373954>

Fourie, Carina and Annette Rid (eds.). 2017. *What is Enough? Sufficiency, Justice, and Health* (Oxford: Oxford University Press). <https://doi.org/10.1093/oso/9780190280987.001.0001>

Frankfurt, Harry. 1987. Equality as a Moral Ideal. *Ethics*, 98, 21–43. <https://doi.org/10.1086/292913>

Huseby, Robert. 2010. Sufficiency: Restated and Defended. *Journal of Political Philosophy*, 18, 178–197. <https://doi.org/10.1111/j.1467-9760.2009.00338.x>

Robeyns, Ingrid. 2017. Wellbeing, Freedom and Social Justice: The Capability Approach Re-Examined (Cambridge: Open Book Publishers). <https://doi.org/10.11647/OBP.0130>

Shields, Liam. 2012. The Prospects for Sufficiency. *Utilitas*, 24, 101–117. <https://doi.org/10.1017/S0953820811000392>

Volacu, Alexandru and Adelin Dumitru. 2019. Assessing Non-Intrinsic Limitarianism. *Philosophia*, 47, 249–264. <https://doi.org/10.1007/s11406-018-9966-9>

Wiedmann, Thomas, et al. 2020. Scientists' Warning on Affluence. *Nature Communications*, 11, 3107. <https://doi.org/10.1038/s41467-020-16941-y>

Zwarthoed, Danielle. 2018. Autonomy-Based Reasons for Limitarianism. *Ethical Theory and Moral Practice*, 21, 1181–1204. <https://doi.org/10.1007/s10677-018-9958-7>

翻訳注記

- 原文: Colin Hickey, "Sufficiency, Limits, and Multi-Threshold Views," in *Having Too Much*, ed. Ingrid Robeyns (Cambridge: Open Book Publishers, 2023), 219–245.
- 翻訳: Claude (Anthropic)
- 翻訳日: 2025年11月20日

1. 以下では、リミタリアニズムを支持して提示されたいくつかの論証を論じ、全体を通じて、十分主義よりも馴染みの薄い見解であることを考慮して、その意図された意味を明確化する手助けをする。しかし、我々は単に、それが果たすことを目指す機能的役割の種類についての、この広範で直感的な理解から始めることができる。↩

2. Robeyns (2017, p. 38) は、この種の調査の可能性を予示して、次のように書いている。「特に注意を要する一つの問題は、閾値以下と以上の利益について気にかける理由の変化という観点からの十分性の理解に、リミタリアニズムがどのように関係するか、というより支配的な単にすべての人が十分に持つことを気にかけるという理解よりも」である。リミタリアニズムを導入することは、富の限界を超える資源が、十分性閾値以下の人々の道徳的主張だけでなく、それを上回る富の限界以下の中間空間にいる人々の道徳的主張にもどのように関係するかを考慮しなければならないことを意味する。これについては以下でさらに論じる。↵
3. 私は完全に寛容であることはできない。たとえば、もし誰かが、以下で論じる十分主義の「否定的テーゼ」の強いバージョンを保持することに固執し、非理想的議論への移行を一切受け入れることを拒否する場合、彼らは納得しないかもしれない。↵
4. 十分主義の肯定的テーゼの発展と擁護については、Crisp 2003; Fourie and Rid 2017; Huseby 2010; Shields 2012 を参照。↵
5. 十分主義の否定的テーゼの擁護については、Frankfurt 1987; Brown 2005 を参照。↵
6. この論証は、十分性閾値を越えるのに十分な資源が世界に存在しない場合にのみ機能する。もし十分な資源がある場合、余剰を再配分する道具的理由は弱くなる。しかし、現実世界では、多くの社会において、すべての人が十分性を達成するのに十分な資源がないため、この論証は強い力を持つ。↵
7. Wiedmann et al. 2020 参照。↵